

化進行への鍵となりそうに思われる。

酒匂川平野左岸に於ける 地形と土地利用

菊 地 力 三 子

目 次

序

第一章 酒匂川平野の概況

第一節 自然環境

第二節 人文環境

第二章 左岸の地形と土地利用

第一節 地 形

1) 概 説

扇状地性平野、左岸と右岸、沖積層の厚さ、
基盤岩石、西縁部地殻構造線

2) 左岸地形分類

分類と基準、各面記載

3) 地形発達史

第二節 土 地 利 用

1) 概 説

左岸と右岸

2) 土 地 利 用

分類、土地利用別記載

結 び

神奈川県西南部に位置し、北部、東西を山地に囲まれ、南部で相模湾に臨む当平野は、相模川平野と共に、神奈川県下に於いて重要な地位を占める。地質構造上アオッサマズナの東南端部にあたり、地形的にはその成因が地溝に由来するものか否かにつき、今なお論議の的となっており、日本に数多い扇状地性平野の一つである。西部には箱根火山の裾野が伸び、その伏流水及び地形的影響とにより、日本有数の被圧地下水地帯である。相模湾暖流の影響による温暖な気候と、防衛上恵まれた地形の利とにより、人類居住の歴史

も古く、稲作農業のみならず、江戸以降小田原を中心に商業も栄え、最近では、地下水及び交通の利を見込んでの工業の進出がめざましい。

日本に数多い扇状地性平野の一つたる当地は、右岸扇状地、左岸上流小扇状地、左岸下流三角洲平野に大別され、左岸東縁部は、漸層崖下の諸小地形面におおわれる。

当平野に於ける海水の侵入の有無については今だに明らかにされていないが、入手資料地質断面図のうち、左岸河口部にはこの所にそのきめ手となる含貝化石砂層が存在する。含貝化石砂層及び、黒或いは青粘土層より、沖積層の厚さもほぼ推定されるらしい。又、計二本の断面図は、小川氏の平野面縁部地殻構造線存在説の間接的証拠としても取上げ得るように思われる。

ほぼ不等辺三角形の左岸地形は、西部に高く、東部に緩斜し、約 $1/300$ の勾配で相模湾に臨むが、私は当地を東部山地及び山麓漸層崖下の小扇地形面、低地上流小扇状地、下流三角洲性平野、花井氏説沈下地塊埋没在的三台地、その他小地形面、海岸砂丘とに分類記載し、浅海先生、式先生の御指導をいただき地形発達史としてまとめた。

当平野は排水良好な乾田地帯であり、60%以上という高い一毛作率を示し、左岸のみでも反収は関東及び県平均を上回り、昔ながらの穀倉地帯である。

地形及び微気候的相異を反映し、左岸と右岸とでは、土地利用上の様相に変化がみられ、箱根火山の裾野が伸びる右岸はその地質及び地下水流の影響とにより一毛作田多く、畑、果樹園は左岸低地部には多いのに対し、右岸には少ない。山地斜面も非対称で左岸の樹園に対し、右岸は畑地である。

農業経営は土地利用を反映し、右岸田畑兼作地域、左岸相模水田複合経営地域、沿岸水田経営地域に分かれるが、農家構成は左岸のみでも、専業69%、兼従兼業50%以上であり、水田経営地域も最近は一毛作の複合経営化の傾向が強く、近郊農村の性格大である。海岸砂丘上の農業集落は、工業或いは漁業を兼ね、比較的農業に主眼をおいているのは、東部山麓相模水田複合経営地域である。

最後に

卒論及び4年間の短期間とはいえ、かえりみれば、すべての点で楽しく思いだされる学生生活についてはいろいろと感想もあり、述べたいのですが、紙面の都合上省略させていただきます。ただ卒論及び学業その他の点でお世話になりました地理科の諸先生方、関係者の方々には厚くお礼申し上げます。今後とも御指導いただきたいと思います。又、クラスの方々、下級生の方々に

は誌上のみでなく、機会あるごとに、文獻を重ねさせていただければ幸いです。

鹿児島県に於ける麓集落の 地理学的考察

河野 泰子

研究地域は現在行政区画に於ける鹿児島県を以って行い、研究目標は正史地理学の立場から麓集落成立の背景たる環境条件を明らかにし、更に地域の環境条件にいかんそれが対応し、或いは対応して行ったかという点に本課題の主眼を置いた。地理学的考察をするには、更に広い視野に立って種々の分野に立ち入り入るべきなのであるが、実際私がなし得た範囲は狭小であり地理学的考察に迄至らなかつたが、課題に対する適切なる言葉が見つからなかつたので以上の如きものとなつた。環境条件として自然環境のみ取り扱つた理由は、本県の自然環境が特異なものであり、それが又麓集落成立の一要因たる位置にあることに注目したからである。自然環境の中でも地形・地質・気候の三分野に留めたが、地形上、重要なことは、細分されていること、又地質上はその殆んどが中生代でこれらをおよって或いは中生代と中生代の間に火山岩地域が発達していること等を述べ、気候上は亜熱帯気候への漸移地域としての性格を有していること、及び県内の四気候区について述べた。以上で自然環境の概要をつかみ、これより本課題の中心の麓集落について述べるのであるが、まず麓の意義及び分布を明らかにし、それから麓の立地条件としていかなる地域が選ばれたが且つ位置の点で他の集落……（在、蒲、町）といかなる関係があつたか、更に現在に至る迄の変遷及現在の県内で占めている地位について述べて来た。本県の現在の主要都市の前身をさかのぼればその殆んどが麓集落に起因していること、そして今日も尚政治的都市として地方政治、経済、文化、交通の中心地となり、機能上は封建時代は政治一色なものから、現在は次第に都市的機能を有し商業的色彩および多彩になつて来ている。しかし中には政治的機能をすっかり他の集落にうつばわれ、かつては栄えた麓も今はさびれた田舎町で零細な農業を営んでいる町もあるが、この様な所ではかつての麓の姿を見ることのできるのである。このことは結局都市計画外の区域であつたこと、即ち、徒歩交通から鉄道開通への変革に伴つて地理上に占めている重要性の増減による事は当然である。